早春の台湾感傷紀行

高橋　祐吉

初めての台湾へ

専修大学の人文科学研究所が主催した総合研究調査は、今年の 2 月 23 日から 3 月 1 日にかけて実施された。「台湾東部研修」と銘打たれたこの調査旅行に、私も参加させてもらった。私の日頃の生活世界は実に狭く、しかも久方ぶりに出掛ける海外旅行とあって、文字通りのお上りさん状態であった。浮ついているつもりはないのだが、お上りさんに失敗はつきものである。同行したＦさんに言わせると、「トラベルにトラブルはつきもの」であるとのことだが、けだし名言ではないか。そこで、この一文をトラベルにまつわるトラブルの話から書き始めてみることにした。

調査旅行の 6 日目にわれわれは恒春（ハンチュン）に足を延ばし、恒春古城を眺めてきた。南北に細長い台湾の最南端にある町が恒春である。かつて台湾や中国の町は城壁に囲まれていたとのことだが、ほとんどの所では、近代化の過程で城壁は取り壊されて道路などになり、城門も部分的にしか残っていないようだ。だが、恒春では再開発が小規模だったこともあったのか、清朝末期の 1879 年に完成したという城壁や 4 つの城門が、比較的良好な状態で残されている。「恒春古城」などと美しい名で呼ばれるのもそのためである。私も昔の町の姿などを想像しながら気儘に散策するつもりでいた。

ところで、台湾最南端の小都市恒春が台湾で一躍知られるようになったきっかけは、2008 年に公開された映画『海角（かいかく）七号　君想う、国境の南』の大ヒットだったようだ。監督は魏徳聖（ウェイ・ダーション）である。この映画は恒春を舞台に撮影されている。懐かしさを感じさせる町並み、古びた城壁や城門、柔らかな色彩の建物などが、映画のストーリー展開とうまくマッチしたこともあって、台湾の人々はこの場所に大いにノスタルジーをかき立てられたようだ。映画の筋立ては次のようなものである。戦前台湾に赴任していた日本人教師と台湾人の女生徒との悲恋の物語を下敷きにしながら、ミュージシャンになる夢破れた台湾人男性の阿嘉（あか）と、日本人女性の友子との現代の恋の物語がオーバーラップして展開していく。既に亡くなった日本人教師が当時書いたラブレターを、あることから、阿嘉が老婆となった女生徒に 60 年後に届けることになるのだが、そのことを通じて阿嘉と友子の恋が実っていくのである。その時空を越えた展開がなかなかに興味深い。最後の音楽フェスティバルに登場する、日本語で歌われる「野バラ」が象徴しているものは一体何だったのであろうか。そんなこ

とをも考えさせる映画であった。

阿嘉の家も残されているので、現在でもこの映画が撮られた街角を見に訪れる人が絶えないようだが、言ってみれば、私たちもまあ同じようなものであったのかもしれない。聖地扱いするつもりはなかったが、私も「恒春古城」に興味を抱いていた。西門の周辺では城壁の上を歩くこともできるということで、登ってみたのだが、トラブルが生じたのはその時である。古い石積みの階段を上って最上段まで来た時に足を踏み外し、地面に額と肘を打ち付けて擦り剥いてしまった。昨年五島列島に出掛けた時も教会の階段で足を踏み外し、その時は後ろに一回転してしまったが、それに続いて二度目の騒動である。しばらくして、「毛がないのに怪我ありとはこれ如何に」といった自虐の笑いも浮かんだが、そんな気になれたのは酷い怪我ではなかったからであろう。不幸中の幸いとでも言うべきか。

余りのみっともなさに情けなく思い恥ずかしくもあったが、その際に周りの方々が消毒したガーゼやバンドエイドや水を差し出してくれたので、ほんとうに有り難かった。すっかり年寄りになったために、ちょっとバランスを崩すと直ぐに転倒に繋がるのだろう。そのために、「恒春古城」が醸し出すノスタルジーをこの機会にのんびりと味わおうなどといった目論見は、すっかり雲散霧消してしまい、写真を撮る余裕すらもなくしてしまった。こうして、私の恒春は城壁での転倒という忘れられない記憶として脳裏に焼き付けられただけに終わったので、ノスタルジーは帰国してから先の映画を再見して味わい直すことにした。

これが転倒による失敗であるが、失敗と言えばもう一つ写真を巡る失敗もあった。今回の台湾行では写真の撮影も愉しみの一つであった。風景写真に強く心惹かれるようになったのはここ３年ほどのことなので、台湾に出掛けて感傷旅行に相応しい写真を撮ってみたかった。先々でいつも以上にたくさんの写真を撮ったのはそのためである。移動中は写真撮影のためにあちこち勝手に動き回ることはいささかためらわれたので（それにしては好き勝手にやっていたような気もするが…）、写真を集中して撮ったのは、ホテルでの朝食後から出発までの時間である。観光バスの運転手の労働時間規制のために出発は比較的遅めだったから、その間ホテルの近辺の路地裏などを彷徨いた。

今回の台湾行は天候に恵まれたとは言えなかったが、私は晴天の景勝地などよりも曇天の路地裏などに強く惹かれていたから、それほど気にはならなかった。日本で気持ちの塞ぐ出来事に心を痛めていたので、言ってみれば心中が曇天のようなものだったからであろう。この一文のタイトルを、たんなる台湾紀行ではなくあえて台湾感傷紀行としたのもそのためである。多くの写真を撮ると、1枚のＳＤカードでは保存しきれない心配もあったので、毎日ホテルに戻ってからその日に撮った写真を眺め、気に入らないものを削除した。私は写真を記録として残しているわけではないので、どうしてもそうしたくなる。帰国してからもたくさんの写真を削除

し、ようやく 50 枚ほどに絞り込んだ。だがそれでもＡ３にプリントして部屋に飾りたくなったのは、そのうちの数枚に過ぎない。

そうした話はともかく、失敗したのは、台湾に到着して 2 日目の夜のことである。前日とこの日に撮影した写真を誤ってすべて削除してしまったのである。カメラには削除方式が二通りあって、一つは一枚一枚確認しつつ削除するものであり、もう一つは同じ日付のものを纏めて一括して削除するものである。当然ながら一枚一枚確認しつつ削除していたのだが、選択を誤って一括して削除してしまった。こちらも何とも情けない話ではないか。台湾に来て早々は何もかもが珍しくて何枚も撮ったが、夜改めて確認してみるといい写真はごく僅かである。どんどん削除しているうちに、うっかり操作を間違ったというわけである。身体のみならず脳まで耄碌してきたということであろうか。削除してしまったのが 2 日目だったからまだよかったが、これが最後の日だったりしたら、目も当てられないところだった。こちらもまた不幸中の幸いだったのかもしれない。

旅の最後に、今回の調査旅行の企画者である堀江さんがこんなことを語っていた。引率者としての彼の率直な感想だったのであろう。一つは、皆さん足腰が弱くなって歩く速度が遅くなってきたこと、もう一つは、皆さんトイレが近くなってきたこと、そして最後に、大学という業界の人々は団体行動が苦手な人が多いということであった。私などにはこのすべてが当てはまったので、自らを省みて内心忸怩たる思いであった。足腰やトイレは年寄りになった所為でもあろうからやむを得ないが、団体行動ぐらいは彼の指示にもっと従うべきであったろう。自由人でありたいと願っているからそうなると言えなくもないが、私の場合などは、すっかり年を取って我が儘になってしまった所為である。

「美麗島」台湾を見る眼

初めての台湾旅行だから、出掛ける前に少しは台湾に関する知識を得ておこうと思い、新書の類いを何冊か手にしてみた。調べてみると、新書だけでも結構な数になる。日本にとっては、それだけ気になる存在だからなのであろう。「台湾有事」などといったいささかきな臭い記事をメディアで頻繁に見かけるようになったこともあって、先頃行われた台湾の総統選挙に関しても多くの報道があった。こうしたホット・イッシューに関しては、識者の方々がさまざまな角度から詳しく論じておられるので、いまさら私などが事改めて何かを書いてみても仕方がない。これまで南の隣国台湾に何の関心も払ってこなかった人間なのだから、知ったかぶりをしてみても意味がなかろう。そこで、今日の台湾の政治動向に焦点を当てたような新書の類いはすべて飛ばし読みすることにして、それ以外のものを真面目に読んでみることにした。

まず最初に手にしたのは、大東和重の『台湾の歴史と文化　六つの時代が織りなす「美麗島」』（中公新書、2020 年）である。手軽に読めるのではないかと思っていたが、案に相違して実に重みのある著作だったので驚いた。著者はあとがきで、「愉快に読める、わかりやすい本、ストーリーに従い読みすすめれば、台湾についての最低限の知識を提供できる」本をめざしたと書いているが、とてもそうは思えない。その重さは、巻末に付された読書案内の量からも窺われる。私が興味を持ったのは、著者が本書を執筆する上で組み込んだという三つの視角である。少し長くなるが以下に紹介してみる。

一つは、日本人が書く以上、「日本人が見た、日本語を通した台湾」という視点から、台湾を描くことである。台湾人の声を聞きとるといっても、日本で生まれ育った筆者の耳を通して、という限界がある。いくら台湾に友人を持っていても、私の見る台湾は、しょせんは外部からの、通り過ぎる人間のものである。それならいっそのこと、日本人が見た台湾、日本語を通して聞こえてくる台湾の声を、主題にしてはどうか、と考えた。日本統治期を中心に、日本は台湾と切り離せない関係を結んだ。この関わりを通して、台湾を描こうとする本書の登場人物には、台湾で暮らした日本人が多く含まれる。

二つ目は、首都台北から台湾を眺めるのではなく、「地方から見た台湾」という視点を持つことである。筆者が 1999 年から 2 年間滞在したのは、南部の古都、台南だった。赴任当初は文化芸術活動の少ない地方都市に対し、不満を覚えることがあった。しかし住みつづけるうちに、台南という街が台湾の歴史において果たした役割を知り、伝統的な生活が色濃く残る街の空気に惹き込まれていった。19 世紀末以降の台湾の歴史は台北を中心に展開したが、北部から見る台湾は、どうしても「近代化」の側面を強調してしまう。本書では、台南をはじめ、伝統的な、地域性の豊かな台湾にも注意を払いたい。

三つ目は、台湾人や日本人をはじめ、台湾と関わる人々の、「声に耳を澄ます」という点である。もちろん筆者にも、意識するにせよしないにせよ、偏見や偏愛がある。台湾の歴史や文化を紹介する際に、筆者の注目する人物や事項は、必ずしも公平ではない。しかし本書に登場する人物、特に日本人が、目の前の、あるいは過去の人の声に対し、熱心かつ慎重に耳を傾けようとした人々だという点には注意を払った。彼らは難しい時代の中で、台湾の人々を尊重し、その声に耳を澄まそうとした。筆者もそれにできるだけならおうと努めた。

以上が著者のあげている三つの視角であるが、どれもこれも非情に含蓄の深い指摘ではないか。自らの「史観」や「視点」や「立場」を疑うこともなく比較的安直に書かれた（かのよう

に見える）台湾本とは、雲泥の差である。今回の総合研究調査は、観光コースにはなり得ないであろう台湾の東部を巡りながら、あちこちに散らばった日本統治期の史跡を訪ね、そしてまた原住民族の世界を再現した展示の一端を覗いてきたのだが、こうした旅程は、彼が指摘した視角とも重なり合うところがあるようにも思われる。それ故この本に興味がそそられたのである。彼は、伊藤潔の『台湾　四百年の歴史と展望』（中公新書、1993 年）を「台湾生まれの著者による、台湾を主体とした歴史を記す意図の込められた、記念碑的な一冊」と述べて高く評価していたので、こちらも続けて読んでみた。私のようなズブの素人にとっても読みやすい本であったし、大変勉強になった。著者の伊藤は宜蘭（イーラン）の生まれで、2006 年に亡くなっている。

ところで、台湾はいつ頃どのようにして地球上に出現したのであろうか。これまでの研究によると、この島はユーラシアプレートとフィリピン海プレートがぶつかり合うことによって形成されたとみられており、現在は東アジアの弧状列島の中央部に位置している。氷河期にはユーラシア大陸との分離、結合を繰り返したようだ。その後気候の変動によって海水面が上昇し、現在の台湾海峡が出来上がっていく。約 6,000 年前には、台湾は今日のような姿になったのだという。中国大陸とは 200 キロ、沖縄の与那国島とは 120 キロの距離にあり、南北 400 キロ東西 200 キロの島で、面積は約 36,000 平方キロだから、ほぼ九州の面積に相当することになる。そしてこの島に現在 2,300 万を超える人々が暮らしているのである。

周囲を海に囲まれた台湾は、海洋との関係がきわめて密接である。新石器時代になって人類は海から台湾に上陸して来たし、そして島内にいたオーストロネシア人も、大海原を越えて外へと拡散していった。壮大な人類史の一齣である。歴史の時代区分として、文字による記録がない時代を先史時代と呼び、文字による記録がある時代を歴史時代と呼んでいるが、それでは台湾が歴史時代に入るのはいつ頃なのであろうか。一般的には、1620 年代の明朝末期に漢人の海商集団（船による商業活動に従事した商人のことであるが、海賊でもあった）が台湾本島に基地を設け、さらにはオランダ人とスペイン人が相次ぎ台湾を植民地としたのが、その幕開けであるとされているようだ。こうして台湾は本格的に世界史の舞台に登場することになる。だが、台湾が「発見」されたのはもう少し前である。先の伊藤は次のように述べている。

> 台湾は西太平洋で活躍するポルトガル人によって「発見」された。それは台湾付近の海域を航行中の船員が、緑したたる美しい島影を目の当たりにして、「Ilha Formosa!（イラ・フォルモサ！）」と感嘆の声をあげたことに始まる。現在のところこの「発見」は、ポルトガル船の種子島漂着の翌年、つまり 1544 年のことと推定されている。Ilha とは島、Formosa とは麗しいという意味で、すなわち「麗しき島」である。もっともポルトガル人は、航海

の先々で美しい島を見るたびに、「イラ・フォルモサ！」と賞賛して、その島の名としてきたので、アフリカ、南アメリカ、アジアの各地には10を越す、この名の島があったとされる。しかし、今日ではフォルモサは台湾をさす固有名詞となっており、とくに欧米諸国では台湾をTaiwanではなく、フォルモサと呼ぶこともしばしばである。

以上が伊藤の紹介するところであり、台湾が「美麗島」と呼ばれることになった経緯である。台湾は全土の3分の2を山地が占め、南北に走る台湾山脈には60を超える3,000メートル級の山々が聳えていたから、海からは島全体が緑に蔽われた優美な姿に見えたことであろう。亜熱帯の気候で雨も多いので、平地でも至る所に木が生い茂っている。だから台湾は「緑の島」でもある。私もそんな印象を持った。最高峰の山は3,952メートルの高さを誇る玉山（ユイシャン）。この玉山は、日本の統治下では新高山（にいたかやま）と呼ばれており、富士山よりも高い新しい最高峰ということで命名されたとのこと。日本の真珠湾奇襲攻撃の際に、「ニイタカヤマノボレ一二〇八」が攻撃開始の暗号として使われたことでもよく知られた、世界遺産級の山である。

さまざまな人々と出逢って

海外に出掛けて面白く感ずることの一つは、庶民の日常の暮らしを直に眺めることが出来ることである。有名な観光地や旨い食べ物にそれほど心を動かされなくなってしまった私のような人間は、とりわけそう思うのであろうか。言ってみれば俗世間に蠢く人間が好きなのである。ところで、人文科学研究所は今から5年前の2019年にも総合研究調査で台湾に出掛けている。この時には、『人文科学研究所月報』の300号（2019年5月）で特集が組まれた。私は参加しなかったから、その時はどんな旅程だったのかを知りたくなり、今回この特集号を手にしてみた。そこには堀江洋文「スペイン及びオランダの台湾植民地支配」と大谷正「遠藤写真館と台湾」の二本の論文に加えて、「蝶王国」台湾を論じた櫻井さんの論文なども収録されているのだが、私のような年寄りにはそうした学術的な論文を読み通すだけの気力はもはやない。

そこで、これらの論文はざっと目を通すだけにして、面白く読めそうに思われた「台湾8日間縦走記」だけをきちんと読むことにした。この縦走記も堀江さんが書いている。この時の台湾行では、高雄、台南、嘉義、霧社、台中、基隆と中西部から北部を廻ったようだ。今回の総合研究調査同様実に精力的に多くの場所を訪ねて見聞を広めている。この縦走記を読むと、訪問先に関する知見を交えた大変詳細な記録として纏められていることが、よく分かる。私などは、タイトルだけを見て旅日記のような文章を想像していたのだが、中身がかなり濃いうえに

たいへん真面目に書かれていたのですっかり当てが外れた。しかし、その分いろいろと勉強させてもらったわけだから、文句を言えるような筋合いではない。読み進めていたら、一カ所だけ私の期待するような記述にぶつかった。紹介してみる。

> 淡水（ダンシュイ）に向かう途中、寄り道をすることにした。海辺の金山の町（新北市金山区）から細い道をかなり登って行くと、東シナ海を見下ろす山の上に富裕層のための金寶山墓園が広がる。この広大で豪華な墓園の一角にある、「アジアの歌姫」鄧麗君（テレサ・テン）が眠る紀念墓園に参った。彼女の両親は外省人、父親は元国民党軍の軍人であったが、中国民主化への強い思いを抱いてタイで客死し、台北で国葬が執り行われたことは日本でもよく知られている。鄧麗君は自分の曲の他に、多くの曲を日本語でも中国語でもカバーしているが、我々が墓園を訪れた時に中国語で流れていたのは『北酒場』。やや興が醒めてしまった。

カラオケ道場の宗匠でもあった故中村平治さんの正統なる後継者を任じている、堀江さんらしい文章である。テレサ・テンと言えば、私は５日目の夜に同行のＡさんと連れ立って近くの公園までイルミネーションを見に行った。なかなか豪華な光のトンネルだった。そこをぶらついていたら、ギターを抱えて歌を歌っている若者がいたので、投げ銭を入れて曲をリクエストしてみた。リクエストしたのは、テレサ・テンも歌っている「夜来香」（イェライシャン）。台湾に来て中国語の「夜来香」を聴いていたら、いっぺんに旅情を掻き立てられてしまった。日本から来た旅行客だと分かって、今度はテレサ・テンの「時の流れに身をまかせ」を日本語で歌ってくれた。

この日の午前中に鯉魚山公園を巡った。廟巡りに飽きてしまった私は、皆が戻ってくるまで勝手に近くを散策して写真を撮ることにした。公園の一角では、中年のおじさんたちがテーブルを囲んで賭け事に熱中していた。また別の場所では、おじさんやおばさんたちがカラオケに興じていた。愉しそうである。カラオケの機材と大型のモニターが軽自動車に積んであったから、どこにでも簡単に移動できるのであろう。朝っぱらから野外でカラオケとは何とも元気ではないか。結構な音量だったと思うが、誰もうるさいなどと言わないところが台湾らしいのかもしれない。日本語の少し分かるおじいさんもいて、日本の歌も歌えると自慢していた。

その他に、宜蘭の酒廠（酒の醸造所のこと）内の広場ではサクソフォンを吹いていたおじさんや、花蓮（ホワリエン）の文化創意産業園区では一人で太極拳をやっていたおじさんとも言葉を交わした。サクソフォンのおじさんは、私が日本の旅行客だと知ると日本の歌謡曲を演奏してくれた。異色だったのは、台湾の友人のところに長逗留しているという日本人のおじさん

であった。このおじさんは宜蘭設置記念館の側でハーモニカを吹いてくれたのだが、そんなことをしていても誰にも変だとは思われないのが、台湾なのかもしれない。こんなことを書いていると、ステレオタイプ化された台湾の「親日感情」言説なるものに、すっかり飲み込まれそうになっている自分を感ずる。

せっかくだから、ここで文化創意産業園区についても一言だけ触れておきたい。2000 年代に入って、各地でこうした名称の施設が続々とオープンしたようだ。その多くは日本の統治時代に建てられたさまざまな工場の跡地を活用したものである。ノスタルジックな佇まいを見せる古い建物の中には、劇場やギャラリー、ショップ、カフェ、レストランなどが入っているとのこと。クリエイティブな要素（文化創意産業）を組み込んだ公園（園区）だということか。政治の世界における民進党の躍進によって、自らのアイデンティティを確立するために台湾の文化的な環境を一新しようとする動きが広がってきたようだが、その一環とも言うべき試みである。

夜市雑感

ところで、先のようないささか開けっぴろげな大らかさが全開しているのが、夜な夜な開かれる夜市（よいち）である。日本であれば縁日の際の屋台や夜店、露店のようなものだが、規模は大きく食のバザールのようでもある。夜市とはいったいどんなところか。中華圏や東南アジアには、夕方から真夜中にかけて営業する屋台や露店などがある。熱帯や亜熱帯地域においては、昼間の暑さを避けて比較的快適な夜に人々が外出するために、夜市が発展しているようなのである。名の知れた夜市ともなれば、もはや観光名所となっているので年がら年中やっている。

夜市は台湾だけにある訳ではないが、台湾の夜市はその数の多さその規模の広さから見て別格である。ではいったい全国に何ヶ所の夜市があるのだろうか。最近の調査によると、登録されている夜市は 164 ヶ所にものぼるのだという。この調査対象は不定期に開かれる夜市だけなので、それよりも規模の大きな観光夜市まで含めれば、その数はさらに膨らむことになる。今では、夜市は台湾の庶民にとってなくてはならない存在となっており、台湾の食文化を象徴する存在であるといっても言い過ぎではない。何故これほどまでに広がり、庶民の暮らしに定着したのであろうか。夜市には食べ物も飲み物もあるからだが、それに加えてパフォーマンスやゲームも楽しめるし、衣料品や日用品なども売られているため、日常の生活ニーズをほぼ満たすことができるからだという。

それに加えて、次のようなこともある。もしかしたら、こちらの方が案外重要なのではない

か。しばらく前に見たテレビ番組で、台南の夜市に出掛けてきた家族連れにインタビューしていたが、妻によれば、旨いし、安いし、夕飯を作らなくてすむから助かるとのことだった。食生活を簡便化して家事負担を軽減してくれるのであれば、定着するのは当然なのかもしれない。もちろんレストランで外食しているわけではないから、食べるものは庶民的なＢ級グルメであるが、実にさまざまな屋台が並ぶので、しょっちゅう出掛けて来ても飽きることはないのであろう。しかも大勢の人々が普段着で集まる賑わいが、独特の熱気を醸し出していることもあって、庶民の生活や憩いの場として殊の外愛されているようなのである。夜市は食に関する文化創意産業園区とでも言うべきか。

台湾の夜市の歴史は、100 年余り前までさかのぼることができるようで、今では広く世界に知られるようになった台湾グルメの多くも、夜市から誕生したらしい。名の知られた食堂やレストランの多くも、最初は道端の屋台から始まったとのことである。昔港や廟の門前などには、天秤棒を担いで軽食を売り歩く露天商が集まっていたようだが、手軽に食べられるし安くて旨いというので人気となり、現在の姿にまで成長してきたのだという。それに加えて、不安定就業と一括りされるようなこうした仕事が、戦後台湾に移住してきた人々の生活を支えていたことも付け加えておかねばなるまい。

当初は、生活水準が上昇していけば夜市は徐々に消滅していくであろうと思われていたようだが、日本のようにはならなかった。戒厳令（1949～1987 年）下では、夜市の存在は公共秩序を乱す都市の社会問題として認識されていたようで、そのため無許可の露店商の取り締まりが強化されたのだという。その後、戒厳令の解除によって台湾社会が急速に民主化され自由を謳歌出来る社会へと変貌していくなかで、夜市は再び活気を取り戻し今日に至っている。もしかしたら、台湾における自由を象徴しているのが、夜市という存在なのかもしれない。近年では、エリアの整備も行われ、国内外の観光客をターゲットにした大型の夜市へと変貌を遂げる所も生まれてきているようだ。

日本統治下の史跡を巡って（一）－史跡の背景にあるもの－

今回の調査では、東海岸の各地に残された日本の統治時代（1895～1945 年）の史跡を数多く眺めてきた。今こんなふうに書き出したが、では遺跡と史跡はどう違うのか。調べてみると、遺跡には、貝塚、古墳、集落跡などの過去の人類の営みが残された場所から、昔の建物や歴史的事件があった場所などまでが含まれるかなり幅の広い概念のようだが、史跡は、そのうち歴史的事件と関わりの深い場所や建物や遺構を指すとのことである。その意味では、私たちが眺めてきたのは史跡だということになる。これが遺産となると無形のものまで含まれることにな

る。宜蘭では中山公園や設置記念館や酒廠を、花蓮では文化創意産業園区や松園別館、それに豊田移民村や林田移民村を、そして台東（タイトン）では旧台東駅や、糖廠跡地などを見学してきた。どれもこれもまだ 100 年前後の時間しか経過していない史跡である。

こうした史跡が残された背景についても、ごく簡単に触れておかねばならないだろう。どの概説書を読んでも、日本の台湾統治期については触れられているのだから、いまさらことあらためて書くまでもないような気もするが、話を進める上での都合もあるのでどうかご容赦願いたい。手元に同名のタイトル『台湾の歴史』と銘打った 3 冊の著作がある。刊行年順に著者名を並べてみると、殷允芃（イン・ユンペン編、丸山勝訳、藤原書店、1998 年）と、台湾の高校の歴史教科書（雄山閣、2020 年）と、若林正丈（講談社学術文庫、2023 年）である。これらの著作を広げながら、われわれが巡ってきた史跡の背景を自分なりに整理してみる。

日本による台湾統治は、日清戦争の結果締結された下関条約により台湾が日本に割譲されたことから始まった。1895 年のことである。台湾は、日本が手にした最初の植民地であった。その前段には台湾出兵があるが、これについては後に触れる。割譲が決定されると、ただちに日本は初代の台湾総督に海軍大将樺山資紀（かばやま・すけのり）を任命して占領軍を派遣し、台北に台湾総督府を置いて統治を開始した。台湾総督には台湾の行政、立法、司法そして軍事にまで及ぶ強大な権限が与えられた。日本の敗戦までの 50 年に及んだ統治の前半期には、総督には駐屯した軍隊の指揮権を持つ軍人が任命されており、文官が総督に任命されるようになるには 1919 年まで待たなければならなかった。

何故かと言えば、日本による台湾の統治が現地住民の激しい抵抗に直面したからである。世界のどの植民地でも同様のことが起こったが、台湾も同じである。平地の漢民族が居住する地域でも、抗日ゲリラの反乱を制圧するのに 1902 年までかかったし、その後も武装蜂起が計画されたり実行されたりした。1915 年の西来庵（せいらいあん）事件では、蜂起は失敗し 866 名もの死刑囚を出す事態となった。この事件は、発生した地名からタパニー事件とも、首謀者が余清芳であったことから余清芳事件とも呼ばれる。漢民族による最大かつ最後の抗日武装蜂起であった。他方、山地の原住民族が居住する地域では、1910 年から 5 年を費やして蕃地（ばんち）討伐作戦を実施しなければならなかった。蕃地とは蕃人の住んでいる土地のことであり、蕃人とは漢民族以外の原住民族に対する日本側（そして清側の）の呼称である。こうして日本は、ようやく 1910 年代の半ばに至ってほぼ全島を支配下に置くことになったのである。

植民地の統治に警察組織の果たした役割は大きかったようだ。統治を日常レベルで確実なものとするために、村々には巡査が配置されて治安と行政の網の目が形成されていったからである。 台湾総督府は、かつて台湾で実施された「保甲制度」（10 戸で 1 甲、10 甲で 1 保とし、甲には甲長を保には保正をおいて責任者とした）という村落における治安維持組織を通じて、警

察官派出所の監督のもとに住民を掌握した。警察は、この制度を通じて、村の道路補修や農事改良技術の普及、伝染病予防措置の徹底、進出する製糖会社の土地買収の手助けなど、住民に広範な役割を担わせたのである（その負担の大きさと処遇の劣悪さが、霧社事件を引き起こすことになった）。「台湾統治は警察政治」（矢内原忠雄『帝国主義下の台湾』（岩波書店、1929 年））と言われた所以である。

総督府はまた経済基盤の近代化事業も推し進めた。1900 年には南北をつなぐ幹線道路が総延長で約 7,000 キロに達し、1908 年には北部の基隆港と南部の高雄港をつなぐ縦貫鉄道が開通した。19 年には、開発の遅れていた東部にも電信線がつながり全島の通信網が完成をみることになる。それとともに、基隆や高雄の港湾近代化工事や海底電線の敷設や無線電信の整備なども行われて、台湾は宗主国日本に深く統合されていくことになった。また、土地調査事業や税制の改定も実施され、複雑だった土地の権利関係が整理されて地租の増徴も可能となった。アヘンや塩などの専売事業の実施とあいまって、総督府の財政基盤はこのようにして整っていくのである。その他に、度量衡や貨幣の統一、台湾銀行の設立による金融制度の整備なども行われた。

日本統治下の史跡を巡って（二）－「植民地的近代化」とは－

こうした経済基盤の近代化事業は、日本の統治期における「効率的」な「強権」の行使によって実現をみたものである。矢内原は先の著作でこれらの措置を「資本主義化の基礎工事」と呼んでいる。この「基礎工事」の上に、政府が主導した開発が進められていくのである。明治維新を経て近代国家への転換に成功した日本は、台湾割譲の当初から版図全体に一元的な支配を行使する意志を有していたようである。いわゆる植民地と言うよりも、新たに獲得した領土として認識していたからであろう。それゆえに、台湾社会にはかつてない密度で日本の支配が浸透していくことになった。

台湾には、日本の工業化を推進するための食糧供給基地としての役割が割り当てられたこともあって、灌漑用水の整備も行われた。さらには、台湾で既に発展していた製糖業が注目され、日露戦争後には日本の企業が続々と参入して近代的な製糖業が確立していった。もっとも、土地を追われた住民にとっては「苦いサトウキビ」であったわけだが…。ついで、日本人の好みと台湾の気候にあった蓬莱米が登場することになる。日本の統治期においては、移出入の相手国は当然ながら日本本土であり、日本で生産された工業製品や雑貨は基隆港から移入され、米や砂糖を中心とする日本向けの農作物や農産加工品は高雄港から移出された。それ以外の移出品としては、バナナ、パイナップル缶、アルコール、樟脳などがあった。また、山岳部にまで

日本の支配が及ぶようになると、森林開発が積極的に進められた。特に阿里山で伐採された檜は、日本に運ばれて靖国神社や明治神宮や東大寺などで使われたのだという。

日本では第一次大戦後の好景気のもとで米価が急騰し、1918 年にはついに「米騒動」にまで発展したために、台湾ではそれ以後先の蓬萊米の作付けが急速に増やされて、米が日本に移出されるようになる。工業部門では、製糖業などの食品加工業を除くと目立った産業は移植されなかったために、台湾は日本の消費財産業の市場に留まっていたが、1930 年代以降、戦時自給体制の一環として重化学工業がわずかながら導入された。日中戦争とそれに続く日本の東南アジア侵略にともなって、軍需物資の供給機能を備えた「南進基地」化が唱えられるようになったからである。

植民地を経営する目的が、母国の利益に奉仕することにあることは言うまでもない。台湾の資源を効果的に獲得するために、総督府は統治の強化を図る一方で、上述したように経済開発にも力を入れた。こうした動きは、「植民地化」と「近代化」の重なり合った進行、すなわち「植民地的近代化」として捉えることができるだろう。先に触れた「効率的」な「強権」の行使が、それを支えたのである。宗主国である日本との一体化のために近代化が促進され、その近代化によって一体化がさらに強められたのである。日本に対する政治的・経済的・文化的従属という代償を払いつつ、米と砂糖を柱とする経済発展を軸にして、台湾は「植民地的近代化」を経験することになった。それによって、これまで纏まりもなく存在していた台湾の各地域がより緊密に結び付けられるようになり、この島全体の社会統合も生み出されていくことになるのである。

今回われわれが眺めてきたものは、台湾東部における「植民地的近代化」の残影であり社会統合の足跡だったのであろう。私などは、史跡を巡るたびに日本の原風景を眺めているような懐かしさを感じたが、そう感じたのは、台湾が植民地であったがために、純粋培養の如くに「日本」が移植されたからであろう。私の抱いた郷愁などは、そのことを忘れかけた余りにも素朴すぎる感覚だったのかもしれない。

日本統治下の史跡を巡って（三）－獻馘碑のことなど－

今回台湾の東部を北から南に移動しながら、「植民地的近代化」の史跡を眺めてきたので、ここでそれらについて纏めて紹介しておこう。その際、日本統治時代の歴史遺産に詳しい片倉佳史の二著である『台湾　日本統治時代の歴史遺産を歩く』（戎光祥出版、2004 年）と『観光コースでない台湾　歩いてみる歴史と風土』（高文研、2005 年）を参照させてもらったことを最初に断っておく。先ずは宜蘭である。宜蘭には 2 泊したが、初日は 1919 年に開業した宜蘭駅を眺

めた後、近くの中山公園に出向いた。この公園が設置されたのは 1909 年のことで、園内には、日本の統治時代の 1926 年に建てられた忠霊塔や日本軍の通信所跡、それにタイヤル族が首狩りの慣習を絶ったことを記念したかなり大きな獻馘（けんかく）碑があった。

やはり気になるのは 1909 年建立のこの獻馘碑であろう。獻はたてまつる、馘は切り取るの意である。しばらく前まで日本でも従業員を解雇することを馘首やクビと言っていたが、語源は首を切るところからきているのであろうか。この石碑の由来が興味深い。宜蘭一帯の山岳部にはタイヤル族の人々が住んでいた。誇り高き彼らは、新たな統治者となった日本を受け入れず、両者は戦闘を繰り返すことになる。結果的には日本軍が彼らを制圧するのだが、その際日本は投降の証として、武器とともに彼らがこれまで確保してきた髑髏を供出させたのである。獻馘碑はその収蔵を記念して建てられたものなのである。

台湾に出掛ける前に、写真集である『昭和史』の別巻Ⅰ「日本植民地史」（毎日新聞社、1985 年）を眺めたところ、そこに生首が写った写真が 2 葉あった。一つは、「日本統治に反抗するサラマオ蕃の討伐に　パーラン社の壮丁たちも参加　日本の軍・警察関係者と勝利の記念撮影を行った　壮丁たちの前に並ぶのは戦果の生首」との説明文があり、もう一つは、「戦果の生首を提げて踊り、男たちの武勇をたたえる霧社蕃パーラン社の女性たち」とある。サラマオ蕃もパーラン社も同じタイヤル族に属している。彼らはむやみやたらに首狩りをしていたわけではないから、残酷な殺し方だと単純に非難する気はないが、ずらりと並んだ生首を見るとやはりある種異様な感に打たれる。こうした首狩りのことを、台湾の漢民族や日本人は出草（しゅっそう）と呼んだ。草むらに隠れ、背後から襲撃して頭部を切断したからである。ちょっとおとなしすぎる表現のような気もしないではなかったが…。

次に出向いたのは、設置記念館である。初代の宜蘭長官であった西郷菊次郎（西郷隆盛の長男）により 1906 年に建設された、和洋折衷様式の建築物である。以後長官の官邸として使われ、1997 年に記念館として公開されることになった。明治時代の木造家屋が美しく修復されており、畳敷きの部屋を巡りながら、200 年に及ぶ宜蘭の歴史資料を眺めることができた。屋敷を囲む日本庭園には、樹齢 100 年になるという楠の大木が葉を茂らせていた。周辺はかつて南門地区と呼ばれ、官舎が多かった所だとのこと。ハーモニカのおじさんがいたのはここである。その後宜蘭酒廠に出向いた。ここが操業を開始したのは 1909 年だから、長い歴史と伝統をもつ酒造工場である。今なお現役で稼働しているとのことであった。工場の一部が開放されており、酒造の歴史を展示した甲子蘭酒文物館や、発酵の仕組みを学べる台湾紅麹館などを見学できる。工場内には日本統治時代の建築物も多いので、紅露酒にそれほどの関心を抱かなかった私は、敷地内の古い建物ばかりを眺めてきた。サクソフォンのおじさんがいたのはここである。

台湾 4 日目となる花蓮では、午前中に文化創意産業園区や松園別館を廻り、午後に豊田移民

村と林田移民村を廻った。1913 年創業の花蓮酒廠の跡地に設立されたのが、文化創意産業園區であり、現在は総合文化スペースへと姿を変えている。広大な敷地には工場関連の建物が並んでおり、コンサートホールや小劇場、展示会場として利用されているとのことである。こちらが興味を持ったのは、原料倉庫として使われてきた日本式の檜造りの建物群であり、それらは今に残る貴重な建築遺産だと言えるだろう。昔どこかで見たことがあるような妙に懐かしい感覚に繰り返し襲われ、写真心がいたくくすぐられた。

もう一つの松園別館であるが、ここは花蓮港を一望できる高台に立った建築物である。松の大木が何本もあったから、そこからこの名が付けられたのであろう。日本統治時代は軍関連の施設だったとのことで、前身は 1943 年に建てられた花蓮港兵事部である。軍事施設とは言っても、日本軍の高級将校たちがサロンを兼ねた司令部として使っていた洋風の建物なので、戦争の面影はほとんど感じない。松林の中をゆったりとした風がながれ、この小高い丘からは花蓮の港や街並みが遠望された。現在は、花蓮という美しい名を持った町に相応しい場所へと変貌しているのであろう。花蓮県にはもともと多くの原住民族が住んでおり、花蓮はサキザヤ族の言葉で「真の人」という意味だとのこと。そう言えば、映画のタイトルである『セデック・バレ』もセデック語で「真の人」である。

日本人移民村を訪ねて（一）－移民村は何故誕生したのか－

日本統治時代の史跡として私がとりわけ興味を抱いていたのは、日本人移民村である。今回は豊田村と林田村を眺めてきた。日本統治時代、台湾総督府によって 1909 年に官営の移民事業が始まり、花蓮や台東の一帯で大規模な移民が行われた。花蓮県では 1910 年に最初の移民村である吉野村が開かれ、その後、豊田、林田、瑞穂と続き、台東県の鹿野などにも開かれた。こうして計 10 箇所あまりのところに開拓移民村が開村したのである。そこには、北海道や四国などの農村地帯から日本人が入植してきた。その結果、当時未開の地が多かった台湾の東部において、農業発展の基礎が築かれていくのである。マラリアや台風に加えて原住民族との抗争もあり、離村した開拓民もかなりの数に上ったという。移民村に関する概略は上記のようなことではあるのだが、こうした分野の研究（山元貴継「日本統治時代の台湾東部における日本人移民村の集落構造とその変化」、『人文地理』72 巻 4 号）を参照させてもらいながら、移民村を巡る当時の状況をもう少し詳しく眺めてみよう。

台湾東部の一連の開発には、当時の台湾をめぐる状況の中で日本人が大きく関わった。とくに移民村については、台湾の西部と東部のそれぞれで建設されていたものの、このう

ち東部の移民村は、適地調査を経て、明治期末から大正期(1900～20 年代)と比較的早い時期から建設が進められた。そして、水稲やサトウキビ、たばこなどの栽培を目指して、多くの日本人が入植していった。しかし、交通の困難に加え、台湾の東部一帯は海岸近くまで山々が迫り、平坦な土地に恵まれていなかったため、移民村の建設は順調には進まなかった。しかも、決して広いとはいえない平野に土砂を堆積させてきた河川も、台湾を頻繁に襲う台風などにより、氾濫を繰り返してきた。また、熱帯性気候の中でマラリアが度々発生したほか、山岳地帯に多く居住する先住民族との衝突もあって、多くの移民が命を落とすことになった。このような厳しい環境のもとで、当初民間で始められた移民村建設は、そもそも実行に移されなかったものも多く、ようやく建設が進んでも、ほとんどがその経営と移民の確保とに行き詰まった。「官営移民村」は、そうした移民村を引き継いで登場した。

これら官営移民村では、宅地や農地が計画的に区画されるだけでなく、その建設に政府に加えて行政が積極的に関与した。そこに居住することになる移民の募集は日本本土の特定の道府県に募集官を派遣して行われ、許可条件を満たして残った応募者が、ようやく現地に入植できた。官営移民村では、それまでの民営移民村での失敗をもとに、移民の定着を図るため、入植した移民にそれぞれ家屋付き宅地や農地を抽選で割り当て、入植後一定期間の代金を経たならば宅地と農地の払い下げを行うことを前提とした。しかし、官営移民村となっても、先述したような厳しい環境のもとで、農業生産や生活は安定するとは限らず、離村者も多くみられたとされる。

こうした文章を読んでいてふと小さな疑問が湧いた。かなりの悪条件に曝されていた東部に、何故移民村を開村しようとしたのかという疑問である（西部にも移民村は開村するが、それは 1930 年代に入ってからである）。もう少し言えば、台湾総督府が自ら官営の移民事業に積極的に乗り出すことになった理由である。それがよく分からなかった。そうした私の疑問に答えてくれたのが、野口英佑の『台湾における「日本」の過去と現在－糖業移民村を視座として－』（ゆまに書房、2023 年）である。読んでみると、事情は思いの外複雑なことが分かる。少し長くなるが、著者の指摘するところを聞いてみよう。

官営移民事業を推進するにあたり、台湾総督府は、①植民地統治における必要性、②将来的な台湾以南への更なる南方進出の足掛かりとすること、③国内の人口過剰問題を解決すること、④国防上および台湾人(当時の呼称は「本島人」)の日本人(当時の呼称は「内地人」)への同化をその理由として挙げていた。したがって、官営移民事業は単なる産業振興

政策ではなく、さまざまな意味を持ち合わせていたことになる。

まず、官営移民事業を始める前に台湾総督府が実施したのが、移民適地調査である。1908年から始められた調査では台湾東部だけでなく、台湾西部の調査も行われた。台湾西部においては、農地の集積が難しく、移民適地調査で何とか目星を付けることができた土地は少なかった。また、調査で見つけた土地についても、土壌の質が良くない平地、もしくは山地ばかりであった。したがって、台湾の自然条件に慣れていない日本人移民が、そのような土地を開墾して農業に従事したとしても、現地の漢人農民よりも劣った立場になる恐れがあることは明らかであったという。加えて、日本に匹敵するレベルもしくはそれ以上に人口密度が高く、日本人と台湾人で衝突を引き起こす可能性があることから、台湾西部は移民事業に適していないという結論が出された。

一方、台湾東部に関する調査については、1909 年と 1910 年にわたって実施され、調査の結果、鹿寮（現在の龍田村を含む地域一帯）など 15 箇所の適地を見つけることに成功した。台湾東部においては、自然環境が厳しいというデメリットがありながらも、人口密度が低いことや、当時台湾総督府によって文化レベルが比較的低いと認識されていた原住民族が住民の多くを占めており、原住民族を日本人に同化する必要があり、それが可能であること、それらを踏まえて模範となる「日本的な農村」を運営することが台湾西部よりも比較的容易であることが、移民事業に適している理由として挙げられたのである。つまり台湾東部は、漢人が生活を営んでいない、いわば「空白の場所」であったため、官営移民事業の候補地として選ばれることとなったのであった。

日本人移民村を訪ねて（二）－移民村崩壊の一断面－

ではそうしたところに移民してきたのはどのような人々で、そこにはどのような事情があったのであろうか。送出地と移民村の連関についての研究などを参照すると、台湾への移民は、19 世紀の後半から広がった日本国内での人口移動の延長線上に位置付けることができるとのことである。農村においては過剰人口問題が深刻だったし、土地が不足していたことも勿論ある。台湾への移民は、植民地の領有後に表面化したように見えてはいるが、それ以前に存在していた人々の広範囲な移動の流れと無関係であったわけではない。岡部牧夫『海を渡った日本人』（山川出版社、2002 年）によると、敗戦前までに渡航者の数が 10 万人を超えたのはハワイ、アメリカ、ブラジルであり、1910 年代までに在住人口が 10 万人を越えたのは朝鮮、台湾、満州であった。北海道への移住もあった。こうしたことから分かるように、明治維新後人々の目は急速に外の世界に向けられ始めたようなのである。海外雄飛のイデオロギーなども一役買っ

たのかもしれない。日本最初の植民地である台湾への移民の募集に人々が積極的に呼応したのは、こうした下地が形成されていたからなのであろう。

豊田は移民村の中でも比較的保存状態が良好であり、小学校の講堂や中山路と民権路の交差点にある鳥居など、日本時代の建築物が残っている。私たちも、現在は碧蓮寺となっている豊田神社などを眺めてきた。1915（大正 4）年創建されたこの豊田神社について、一言だけでも触れておこう。豊田村にはいくつかの集落が集まっており、神社は集落のはずれに位置していた。碧蓮寺の境内には石灯籠が残っていたが、数年前に地元の有志によって復元されたものだという。またここには、開村 30 周年記念碑もあった。これは第 18 代の台湾総督であった長谷川清が揮毫したもので、建立は 1942（昭和 17）年。高さが 170 センチもある大きな石碑である。現在の寺院は神社を彷彿とさせるような風貌ではないが、それでも神社時代の狛犬が残っていた。余りにも静かな時間の流れの中で、記念碑も狛犬もゆっくりと朽ち果てていくのであろう。新天地での成功を夢見て移住してきたものの、果たせなかった人々のことを偲んだ。

何故果たせなかったと書いたのか。それは、1945 年の日本の敗戦によって全員日本に帰還せざるを得なくなったからである。移民の多くは残留を希望していたようだが、それは許されなかった。こうして、開拓移民村はある日突然一気に崩壊するのである。土地や家屋はもちろん、これまでに築き上げてきたものをすべて失うことになったのだから、移民村における人々の動揺は相当なものであったに違いなかろう。日本に引き揚げてきた人々は、その後どんな暮らしを余儀なくされたのであろうか。そんなことも知りたいとは思うが、もはや歴史の闇の中である。移民村の話ではないが、司馬遼太郎は『街道をゆく 40　台湾紀行』（朝日文庫、2009 年）のなかで、花蓮に向かう途中で同行の案内人から聞いた、以下のような話を書き留めている。その場所は台南市の新栄である。

> 話は一転して、引揚げのときの場面になった。そのときは、着のみ着のままでした、とこの人はいう。当時、中華民国の命令によって、衣料は一人三着とかぎられていたのである（行李二個と持てるだけの手荷物、現金千円の持参が許された）。輸送の都合で、出発の日は順次決められていて、電蓄の奥さんは後発組になった。田中家は先発組で、後発の人達に見送られて新営駅に集合した。見送る人も見送られる人も、前途に不安があった。社会科学ふうにいうと、〝日本帝国主義〟の決算の風景だった。しかし少年にとっては、貝が殻から身をもぎとられたように、学校や友達や近所という貝殻をうしなって、白い剝き身（むきみ）一つになったような心もとなさでいた。
>
> 列車に乗りこみ、やがて車輛がきしんで動いたとたん、いままで見送りの群れのなかにいなかった電蓄の奥さんが、「タナカさぁん」と、駆けてくるのがみえた。準造氏の母親は

あわてて車窓から手をさしだした。電蓄の奥さんはその手をにぎり、にぎったままフォームの端まで駆けつづけた。そのあと、小学校六年生の準造氏は激しく泣き、一時間以上も泣いた。すべての日常が去った。電蓄の奥さんが少年の日常性の象徴だったかもしれず、彼女が遠くなったとき、自分の少年時代はおわった、とおもったそうである。

5 日目の台東では台東糖廠にも立ち寄った。1913 年に設立された製糖工場の跡地だとのこと。製糖業の歴史はかなり古い。日本の統治時代には、台湾の基軸産業となるまでに発展したことは既に触れた。この跡地は、現在歴史遺産の保存と文化の活性化を目的とした「台東糖廠文化創意産業園區」となっている。敷地内には工場や鉄道、機関車、貨車などが保存されており、往時を偲ぶことができる。今は錆び付いてしまった鉄路の上を、サトウキビを満載した貨車が何台も連なって走っていたのであろう。改装された倉庫などの建物にはショップや工房やカフェなどが入居しているようだが、私のような人間は、製糖工場の跡地が醸し出すノスタルジックな光景にばかり心が奪われてしまった。どこかに栄枯盛衰の理のようなものを感じたからなのであろうか。

台湾の原住民族のこと（一）－原住民族とは誰のことか－

今回の調査旅行のもう一つの柱となっていたのは、台湾の東部に集中している原住民族の遺跡を訪ねることであった。どこを見学してきたのかと言えば、4 日目の花蓮での「阿美族民族中心」であり、5 日目の台東での「卑南遺跡公園」と「国立台湾史前文化博物館」であり、そして 6 日目の屏東（ピントン）での「台湾原住民族文化センター」である。訪問先がどんなところだったのかを紹介する前に、まずは台湾の原住民族に関する歴史と現状について、ごく簡単に触れておきたい。

漢民族が中国大陸から渡来する前の台湾において、主役として存在していたのが原住民族である。16 世紀の中葉以降、漢人の海商集団が台湾を拠点に交易を始め、17 世紀以降には漢民族の移住が盛んになるのであるが、それまでは原住民族が昔から台湾に居住していたのである。ところで、原住民族という表現であるが、これを先住民族と記述している著作や記事もある。どちらの表記を使用すべきなのであろうか。彼らの呼称は時代とともに変遷してきたのであるが、台湾の民主化が進んだ 1994 年に、彼ら自身が主張する「台湾のもともとの主人」という意味の「原住民」が憲法の追加修正条文に明記されることになった。そして 97 年には「原住民族」とされて現在に至っているとのこと。そうであるならば、ここでは彼ら自身の主張に従って原住民族と記さなければならないだろう。

こうして、彼らは20世紀末に至ってようやく自らが主張する呼称を獲得するのであるが、そこに至るまでには長い道のりがあった。清の時代は「蕃人」（ばんじん）と呼ばれた。蕃人のなかでも、漢民族の支配を受け入れて税や労役を課せられた原住民族は「熟蕃」（じゅくばん）、そうではない原住民族は「生蕃」（せいばん）と呼ばれた。日本の統治下においても当初は「蕃人」と呼ばれていた。「蕃」は「蛮」と同意語であり、「未開の」あるいは「野蛮な」といった意味である。「蕃人」とはよくも言ったものである。「土人」も同じような意味合いの呼称だろう。その後「高砂族」と呼ばれることになったが、これは、のちに天皇となる親王裕仁が台湾を訪問したのを記念して、台湾総督府が1923年に「蕃人」を「高砂族」の呼称に改めたためである。とはいえ、日本本土はもちろん台湾にいた日本人の口から「蕃人」という言葉が消え去ることはなかったようだ。日本の新聞記事でもそうだったらしい。映画『ＫＡＮＯ』（監督・魏徳聖、2014年）にもそんなシーンが登場している。

第二次世界大戦後に台湾を統治した中華民国は、高砂族を「高山族」に変え、のちに「山地同胞（山胞）」としたらしい。このように、台湾にもともと住んでいた人々は、有史以来、時々の外来政権によってさまざまな呼称で呼ばれて社会の周辺や底辺に追いやられ、そうした状況を甘んじて受け入れざるを得ない立場に置かれてきた。現在では、台湾政府が認定している原住民族は16部族の55万人であり、全人口のわずか2%を占めているに過ぎない。2014年のヒマワリ学生運動の高揚などをも背景にして、2016年に民進党の蔡英文が総統に就任した。その彼女は、初めて迎えた「原住民族の日」（8月1日）に、原住民族の過去400年に及ぶ苦難の歴史に対して謝罪した。その背景にあったのは、1980年代から続いてきた原住民族を巡る権利回復の運動である。この私は、そんなことなど何も知らなかったのだが…。

戒厳令が撤廃されて台湾社会全体が民主化に向かうなかで、1984年には、学生や長老教会関係者らを中心とした「台湾原住民権利促進会」が発足し、88年には17条の「台湾原住民族権利宣言」が発表されている。こうして、「台湾原住民族」の名のもとに、彼らは土地の返還や自治の実現などを要求していくのである。この動きの中に長老教会が登場しているが、この長老教会とはプロテスタントの長老派教会で、台湾で最大の教派なのだという。原住民族に信者が多いこともあって彼らの立場を擁護しており、政治的には民進党の主要な支持団体となっているとのこと。われわれは、宜蘭で「台湾基督長老教会芝苑（姫望）祈念教会」に立ち寄ったが、それは上記のような関わりが意識されていたからであろう。出掛ける前に堀江さんの話をきちんと聞いておけば、教会でもう少し敬虔な態度を取れたはずなのだが、知ったのは帰国してからなので後の祭りである。

台湾の原住民族のこと（二）－原住民族の現在－

ところでその台湾の原住民族であるが、では彼らはいったいどこから来たのであろうか。研究者によれば、彼らはオーストロネシア語族（Austronesian language family）に含まれるということだから、その祖先は海から渡って来たのではないかと考えられている。オーストロネシア語族とは、台湾から東南アジア島嶼部、太平洋の島々、そしてマダガスカル島にまで広がる語族のことである。台湾の場合、とりわけ太洋州や東南アジアのオーストロネシア語族との繋がりが密接だということである。こうした分布図の中で、台湾の言語がもっとも多様で差異も大きいことから、台湾がオーストロネシア語族の起源であり、対外への拡散の起点だったのではないかと想定する研究もあるらしい。こうした広がりのなかに台湾は位置付けられているのである。台湾と言えば中国大陸との関係しか思い浮かばなかった私のような人間にとっては、思いもよらない展開である。

原住民族は、現在は平地に住む原住民族と山地に住む原住民族に区分され、前者は平埔（へいほ）族、後者は高山（こうざん）族と呼ばれているが、この区分は居住地域の違いから便宜的に用いられているにすぎないので、正確な民族区分とは言えないとのこと。平埔族にはケタガラン、クバラン、タオカス、パポラ、パゼッヘ、バブザ、ホアンヤ、サオ、シラヤの 9 族が含まれ、そのすべてが台湾の西側に分布している。高山族にはタイヤル、サイシャット、ブヌン、ツォウ、パイワン、ルカイ、アミ、プユマ、タオ（ヤミ）の 9 族が含まれており、こちらは東側に分布している。しかしながら、その後例えばタイヤル族からタロコ族とセデック族が分離するなどしたので、原住民族の分布はかなり複雑になっている。そのなかでも比較的広い範囲に分布しているのは、タイヤル族、ブヌン族、アミ族、そしてパイワン族である。

高山族の場合、男性が狩猟を担い女性が粗放農耕を行っていたようだが、固定した耕地は持たなかったとのことである。タイヤル族、サイシャット族、タロコ族、セデック族など東側のなかでも北部に分布する原住民族のグループでよく見られた習俗として、入れ墨がある。入れ墨をすることを入墨と言うが、男性の入墨は勇気がありかつ狩猟の名手だという印であり、女性の場合は織物が上手であることの印であったようだ。こうした入れ墨のあることが結婚するための条件とされていたのだという。映画『セデック・バレ』（監督・魏徳聖、2013 年）にもそうした話が登場している。

ここまで書いてきて、魏徳聖の三部作と言われている映画にすべて触れることになった。その三部作とは、制作年順に『セデック・バレ』と『ＫＡＮＯ』と『海角七号　君想う、国境の南』である。これらの三作はいずれも台湾で大きな反響を呼んだ映画である。せっかくだからと思って、今回台湾に出掛ける前に見たのだが、その後帰国してから改めて見直してみると、いずれ

も台湾を知る上で不可欠の映画であることがよく分かる。台湾の歴史と民族的な多様性を踏まえて作られているので、制作者が台湾人のアイデンティティを探ろうとしているようにも思われた。しかもそこにエンターテインメント性が加わっているのだから、大きな反響を呼んだのも当然であったろう。台湾映画と言えば、私などは侯孝賢（ホウ・シャオシェン）の『非情城市』ぐらいしか知らなかったから、今回の台湾行を通じてその認識が一気に一新されることになった。こちらも思いがけなくも嬉しい展開である。

上記のような話を前提にして、われわれが訪問した先を順次紹介してみよう。まず花蓮の「阿美族民族中心」である。台湾で最も大きな人口規模を持つ原住民族のグループがアミ族であることはよく知られており、その数は 20 万人を超える。アミとは彼らの言語で北を意味する。その多くは、花蓮から台東、屏東（ピントン）にわたる東部一帯の海岸沿いや山間部に暮らしている。アミ族はコメなどの農業やブタなどの畜産で生活し、海岸部では漁業を営んでいる。伝統的な集落は他の原住民族の集落に比較して大きく、500 人から 1,000 人規模が典型的だという。また花蓮や台東、あるいは遠く離れた台北や高雄で都市生活を送っている者も多いとのこと。このアミ族の伝統的な住居や倉庫、集会場などを再現したのがここ「阿美族民族中心」である。ステージで民族舞踊でも見ることが出来ればよかったのだろうが、生憎それは叶わなかった。私が感慨深く眺めたのは、竹で作られた比較的大きな筏である。太古の原住民族が、こうしたものを操って魚を捕ったり航海に出ていったのかと思うと、その勇気に畏敬の念さえ抱いてしまった。

台湾の原住民族のこと（三）ー「卑南遺跡公園」などー

次に向かったのは台東の卑南（ベイナン）にある「卑南遺跡公園」である。このプユマ族の遺跡は、当時は面積が 30 万平方メートルを超える大型の集落であったと考えられており、これまでに台湾で発掘された集落の中ではもっとも大きく、しかももっとも完全な姿で残っているのだという。それとともに、ここからは台湾有史以前の人類の住居跡も発掘されている。その後政府によってこの遺跡が公園として整備され、園内に国立博物館が設立されることになった。それだけ重要な遺跡だったからであろう。因みに、プユマとは彼らの言語で団結を意味するとのこと。漢民族に対して団結して立ち向かうという思いが込められているのだという。卑南遺跡の主な見どころは、今から 2〜3 千年前の卑南における新石器時代の墓や住宅、各種生活用品などである。そして公園は、実に広々として美しく手入れも行き届いている。ここを彷徨いて目に付いたのは、何柱もある「月形（つきがた）石柱」である。かなり大きいので、誰もが何だろうと思うに違いない。こうした巨大な石柱は、太古の祭祀の際に崇められていたのであろ

うか。山にあった巨石が割れて、そこから祖先が誕生したとの伝承もあるらしい。巨石信仰は太古の民族に共通してみられるようだが、私はこのように鋭くとがった巨石を見たのは初めてである。

続いて、同じ台東にある「国立台湾史前文化博物館」を訪ねた。「台湾の過去と現在をむすび、国際的視野で台湾文化を考える博物館」であると銘打っているだけあって、実に立派な博物館である。台湾の先史文化と台湾の原住民族の文化に関連した遺物が展示されていた。台東にはアミ族、ブヌン族、プユマ族、パイワン族、ルカイ族といった多様な原住民族が居住しているので、そのような地に相応しい博物館だと言えるだろう。かなり広いので短時間ではとても廻りきれない。私が気になったのは、館内に掲示されていた大きな横断幕である。そこには「我是誰？　WHO AM I」と書かれていた。昔見たゴーギャンの畢竟の大作「我々はどこから来たのか　我々は何者か　我々はどこへ行くのか」を思い出した。私にとっての今の関心事は、「我々」ではなく「我」であったので、「我是誰？」が気になったに違いあるまい。台湾人としてのアイデンティティを探るためには、「我々はどこから来たのか」を明らかにせねばならないということなのだろう。「国立台湾史前文化博物館」の展示を眺めながら、そんなことをぼんやりと考えた。

最後に、屏東の「台湾原住民族文化センター」であるが、たくさんの所を見て廻っているうちに、いったいここがどんな場所だったのかすっかり忘れている。恒春で転倒した直後に廻ったところだったので、いささか気が動転していて記憶に残らなかったのかもしれない。そんなわけで、ここに関して記すべきことは何もない。こんなふうにしてあちこちを訪問しながら思ったことは、原住民族との共生や、それぞれの民族の固有の文化を継承していくことの重要性である。少し前に、集中や統合ではなく多様性を尊重し、排除や分断ではなく包摂を重視し、否定や論難ではなく対話を選択すべきであるなどと偉そうにブログに書いたことがあったが、そんなこととも一脈相通ずるものがあるのかもしれないと思った。

台湾の原住民族のこと（四）－原住民族への眼差しを巡って－

ここで余談を記しておきたい。先にタイヤル族が行ってきた首狩りのことに触れたが、その続きのような話である。台湾に向かう飛行機のなかで、たまたま国際コミュニケーション学部の井上幸孝さんの隣に座ったので、あれこれと雑談を交わした。彼はスペイン、メキシコ、フィリピンの歴史、とりわけメキシコの原住民族の歴史を研究しているとのことであった。視野狭窄気味の私などがまったく知らない世界の話なので、大変興味深く聞かせてもらった。そして、最近青山和夫編の『古代アメリカ文明　マヤ・アステカ・ナスカ・インカの実像』（講談社現代

新書、2023 年）に、彼がアステカのことを書いたことも教えてもらった。そんな話のなかに、「糞尿譚」や「麦と兵隊」で知られる火野葦平の話も登場した。彼の纏めた『比島民譚集　フィリピンの島々に伝わる話』（国書刊行会、2024 年）の解題を、井上さんが書いたというのである。火野がペン部隊の一員としてフィリピンに行ったことは微かに記憶にあったが、こうした本を纏めたことなどまったく知らなかった。そして、少し奇異に思ったのは、解題を井上さんが執筆したことであった。どんな繋がりがあるのか見当が付かなかったので、解題だけコピーして送ってもらえないかと頼んでみた。

台湾から戻って程なくして、そのコピーが送られてきた。そして、先の『古代アメリカ文明』の方は自分で入手して拾い読みしてみた。ともにとても面白いのである。解題の方は「スペイン、メキシコ、フィリピン－海を越えて重なり合う歴史と文化」と題されており、そこには、マゼランによってフィリピンとスペインとの最初の接触が生まれ、その後メキシコを支配していたスペインが、太平洋を介してフィリピンと往来できるようになり、スペインの統治で「メキシコ化したスペイン文化」がフィリピンにもたらされたのだと書かれていた。スペインがオランダに続いて台湾の北部に進出し、サン・サルバドル要塞やサン・ドミンゴ要塞を築いたことはよく知られている。先に紹介した堀江さんの縦走記にも詳しく紹介されている。大海原が世界を繋ぎ、そこに新たな歴史が紡がれていったのである。

『古代アメリカ文明』もなかなか刺激的な本だった。総論を書いている青山和夫によれば、学校で学んだが故に常識のようにして語られている「世界四大文明」史観は、脱構築されなければならないとのことである。何故かと言えば、この史観は学説でもないし、古代アメリカに存在したメソ（「中間」という意）アメリカとアンデスの二つの一次文明を、無視しているからである。これらの古代アメリカ文明は、マス・メデイアによって謎や不思議や神秘に彩られた世界ででもあるかのように描かれてきたので、その実像は今日まで歪められたままだという。その例としてアステカの「生贄」があげられていた。

井上さんは、この著作においてアステカ王国の実像を明らかにしようとしていた。彼は、スペインが征服の正統性を示したいがために、宗教的な儀礼において行われた「生贄」や「食人」（カニバリズム）の風習を、過度に強調してきたのではないかと言うのである。こうしたものを、日常化した奇習あるいは残酷物語の類いとして見ようとすることは、「中世ヨーロッパでは『魔女狩り』しか行っていなかったとか、日本の武士は全員が『ハラキリ』をしていたと錯覚させるような誇張をするのに等しい」と述べられていたが、確かにそうかもしれない。言い得て妙である。ここから話を転ずれば、パイワン族の首狩りなども同じようなものではないかと思われた。蕃人の奇習として首狩りを過度に強調することは、原住民族に向けられた我々の眼差しを曇らせるものなのかもしれない。

牡丹社事件・台湾出兵・琉球処分（一）－牡丹社事件とは－

恒春から屏東に向かう途中、「牡丹社事件祈念公園」に立ち寄った。私はこの事件についての予備知識をまったく持っていなかったこともあって、公園をしっかりと見て廻ったというわけではない。帰国してこの文章を綴り始めたところ、牡丹社事件が台湾出兵や琉球処分をもたらした、きわめて重要な事件であったことを初めて知ることになった。牡丹社事件とは、1871 年に台湾の原住民族が宮古島の漂流民を殺害した事件に端を発し、1874 年に日本の軍隊が原住民族の集落である牡丹社に侵攻し制圧したところまでをさす事件である。映画『セデック・バレ』で描かれた霧社事件（1930 年）だけではなくこの牡丹社事件についてもさまざまな研究が積み重ねられているようなので、これまで不勉強だった私がこの間の俄勉強で知ったことを偉そうに書く気など毛頭ない。ただ感じたこと整理してみるだけである。

この事件の発端は、1871 年に発生した船の遭難事故である。沖縄本島の首里へ年貢米を運んだ八重山と宮古の 4 隻の船のうちの 1 隻が、その帰路に台風に遭って台湾の近海で遭難するのである。69 名の乗組員のうちの 3 名は溺死したが、残りの人々は台湾の東南海岸に漂着した。山中をさまよった彼らは、牡丹社（社とは集落のことである）の原住民族であるパイワン族に助けられたようだ。しかしながら、言葉が通じなかったために意思疎通を図ることが叶わず、パイワン族に拉致されてしまう。遭難者たちは隙を見て集落から脱出したが、パイワン族はこれを敵対行為と見なして 54 名を斬首した。残りの 12 名は漢人の移住者に助けられて、中国福建省の福州経由で宮古島へと送り返されたのだという。台東出身の作家である巴代（パ・タイ）の『暗礁』（魚住悦子訳、草風館、2018 年）によると、貴重な食料や水を与えられたにも拘わらず彼らが脱出したのは、塀の上に飾られていた髑髏を見て恐怖におののいたからであるという。救助を求めた船員たちが原住民族に斬首によって殺害されたので、政府も国民も新聞もともに憤激して興奮したはずである。

この事件を受けて、明治政府は清に強く抗議し賠償を要求した。しかしながら、清は責任を取ろうとはしなかった。それどころか琉球はもともと清の支配下にあるので、明治政府の主張は内政干渉にあたると主張した。さらに、パイワン族のような生蕃（せいばん、清の支配に服しない原住民族のこと）は「化外（けがい）の民」（化外とは国家の統治の及ばないところという意味である）なので、賠償要求に応ずるつもりはないと突っぱねるのである。何故かと言えば、当時の琉球王国は複雑な立場に置かれており、日本と清がともに領有を主張していたからである。琉球王国は、薩摩藩と朝貢関係を結んでいただけではなく、中国とも朝貢関係を続けていた。いわゆる「日支両属」だったのである。明治維新後には、廃藩置県（琉球は当面鹿児島県の管轄とされた）が行われただけでなく、国民国家の形成のために国境の確定が重要な課

題として浮かび上がっていた。その際に、できるだけ版図を広げようとする意図が存在していたことは言うまでもない。その背景には、明治の指導者たちが抱いていた尊皇攘夷の国学思想がある。

そこでまず問題となったのが、先のような立場にあった琉球王国だった。こうした状況下で起こったのが牡丹社事件である。政府は、この機に乗じて琉球王国と清との朝貢関係を断絶させ、薩摩に属していた琉球王国を日本の完全な統治下に置くことを模索し始めた。こうした動きが急がれた背景には、先の殺害事件に対する報復措置として、台湾への出兵を主張する議論が急速に高まっていたこともあった。しかしながら、殺害事件を大義名分として台湾に出兵するためには、当然ながら、少なくとも琉球が日本の統治下にあることを内外に公言できるだけの根拠を確立しておかなければならない。明治政府は、この事件を琉球の帰属問題に利用しようと考えたようである。そのうえで、征韓論を巡る対立から生じた不平士族の不穏な動きを外に向けさせるためにも、台湾出兵に活路を求めていくのである。

牡丹社事件・台湾出兵・琉球処分（二）－台湾出兵とは－

そこで明治政府は、殺害された琉球人は日本の国民であり、生蕃に対して清が処罰できないと言うのであれば自ら討伐すると主張して、1874 年 5 月、陸軍中将西郷従道（さいごう・つぐみち、隆盛の弟）の指揮の下に、3,600 名にも及ぶ警察官と軍人を台湾に出兵させた。近代兵器で武装した日本側は、牡丹社の頭領親子を殺害するなどして（先の祈念公園には、日本軍と戦って戦死した親子の像が建っていた）戦闘では圧倒したものの、マラリアで 561 名が死亡するという事態に見舞われた。そのため制圧後は速やかな撤退を望んでいたと言われる。これに対して清は、日清修好条規に定める領土の相互不可侵条項に反するとして日本に抗議したが、当時は洋務運動が進行中で海軍の装備が未だ近代化されていないという事情もあって、開戦に踏み切ることはできなかったようだ。

双方の思惑が交錯するなかで、清はやむなく日本の出兵を義挙と認めて賠償金 50 万両を支払い、日本は台湾に対する清の統治を認めて撤退することになった。その和議書の文面には「台湾の生蕃かつて、日本国臣民らに対して妄りに害を加え」という一文が挿入されていたので、明治政府は清が琉球を日本の一部であると認めたものと解釈して、当時琉球王国を支配していた尚氏を武力で威嚇しながら、王国を解体して日本への併合を推進していくのである。これが琉球処分である。この処分が完了するのは 1879 年のことであり、台湾出兵から 5 年後のことであった。

日本の台湾出兵は「征台の役」ともいわれ、近代日本が行った最初の海外出兵であった。当

時日本では、西郷隆盛らが朝鮮半島への出兵を主張して盛んに征韓論を唱えていたが、大久保利通らの政府首脳は内治優先を主張して鋭く対立していた。しかしながら、こと台湾に関しては内治派の大久保らも出兵を容認していたようだから、明治政府の基本姿勢は、すべての外征を否定するようなものではなかったのであろう。いやそれどころか、さまざまな機会を捉えながら膨張主義的な指向を強めていたのではあるまいか。その辺りのことに関して、司馬遼太郎は先の『台湾紀行』で次のように述べている。

近代国家である手はじめは、国家の領土を、 アジア的「版図」の概念から脱して、西洋式の領土として明確にすることだった。ただし、国際法など法知識については、明治初期政権は、御雇外国人から借りた。たとえば琉球は、両属（清の版図と日本の版図）だった。たまたま明治 4（1871）年、琉球国の島民 66 人が台湾の東南海岸に漂着しそのうち 54 人が山地人に殺された。山地人は、西海岸の漢人だとおもったという。

日本はあざやかすぎるほどの手を打った。まずその翌明治 5 年 9 月、琉球王国を琉球藩にし、国内の一藩とした。清はのどかにもこれに対し、抗議を申し入れなかった。殺された琉球の島民は、日本人になった。 この基礎の上で、使者を北京に送り、清朝に抗議した。清側は口頭でもって、「台湾の蕃民は化外の者で、清国の政教はかれらに及ばない」と答弁した。日本はその後、一貫してこの口頭答弁を基礎とし、台湾東半分は無主の地であるという解釈をとった。その後、清国は表現を変えた。 両国のあいだで水掛け論がかさねられた。この時期、明治維新の主勢力だった旧薩摩藩(鹿児島県)が、新政府に不満で、半独立を維持し、他の府県の不平士族とともにいつ暴発するか、きわどい状態にあった。日本政府は、国内に充満したガスを抜くべく、まったく内政的配慮から、兵を台湾部に出した。明治 7（1874）年のことである。

清国は、おおらかだった。ほどなく、清国はこの討伐費を日本に支払ったのである。支払うことによって、清国は台湾東部が自国領であることを証拠づけた。さらに清国は台湾が自国領であることを明確にするために、明治 18（1885）年、台湾を台湾省に昇格した。つまり、〝国内〟になった。〝国内〟は、10 年つづいた。明治 27、8（1894、95）年、日清戦争がおこり、下関条約の結果、台湾は日本領になった。

何とも「おおらか」で、「あざやかすぎる」ほどの描きっぷりではある。牡丹社事件の起こった場所を確認しようと思って、ガイドブックに載っていた台湾の南端部の地図を眺めていたら、恒春の近くには牡丹の地名はもちろんのこと、琉球藩民の墓や日軍討蕃軍本営地記念碑や石門（せきもん）古戦場跡などが載っていた。この石門で日本軍とパイワン族が交戦したのである。

牡丹社事件のことを知らなければ、古戦場の跡地を見ても何も思うことはなかったかもしれないが、知ってみると、事件後の日本の行方を何やら暗示しているように思われなくもない。われわれが眺めてきた恒春古城は、日本からの防衛の必要性を感じた清が、この事件の後に完成させたものだという。本稿の冒頭で触れたように、それは 1879 年のことである。日本の対外膨張の意図を嗅ぎ取ったからであろう。

暇に任せて読書らしきことをしていると、あれこれと面白い発見がある。まずは巨視的な発見から。毛利敏彦『台湾出兵　大日本帝国の開幕劇』（中公新書、1996 年）には、「アヘン戦争に始まる大清帝国崩壊という世界史的大事件は、台湾出兵をきっかけに本格的な過程へと入り、東アジア国際システムに一大流動化状況をもたらしたというべきであろう。その意味において、台湾出兵は、衰退する老大清帝国と勃興する新進大日本帝国の双方がえがく軌跡の交差を象徴的にしめした事件であった」と書かれていた。微視的なものになると、吉岡吉典『総点検日本の戦争はなんだったか』（新日本出版社、2007 年）には、外務卿だった副島種臣の「此地を取りて我有となし、永く皇国の南門を鎮めん」と語ったことが紹介されていた。出兵前から台湾の植民地化の野望が兆していたということなのだろう。さらにこの本には、石門を占領した日本の兵士が、12 の首級の頭髪を青竹に縛り付けこれを担いで意気揚々と凱旋したことなども紹介されていた。台湾の原住民族の首狩りを野蛮であると非難しながら、自らも似たようなことをやっていたわけである。

台湾人日本兵と高砂義勇隊のこと

あれこれと台湾のことについて調べ、思い付くままに文章を綴っていると、記憶の底から浮かび上がってくるものもある。そんな話を書いておこう。日本の植民地であった台湾の戦時下の様相とはどんなものだったのだろう。1937 年の盧溝橋事件以降、多くの台湾人の軍夫や軍属が中国や東南アジアの戦地に送られ、人夫や通訳などの後方支援に当たっている。1941 年末からは、陸軍が原住民族を募集して「高砂挺身報国隊」（のちに「高砂義勇隊」に改称）を編成し、彼らを東南アジアのジャングルに送り込んだ。戦争の拡大と緊迫した戦況を受けて、1942 年には志願兵制度が導入され、台湾の青年も軍人の身分となって戦場に向かったのである。

戦況が悪化した 1945 年には徴兵制が施行され、15 歳から 60 歳までの男子、17 歳から 40 歳までの女子には、徴用に応じ兵役に服する義務が課された。その他にも多くの台湾人々が飛行場や防衛施設の工事に従事させられたのだという。それまでは、植民地の人々には兵役の義務はなかった。もちろんながら特典などではなく、軍部が彼らの忠誠心に疑いを持っていたからである。さらには従軍「慰安婦」の募集も行われた。日本政府の統計によれば、軍人や軍属と

なった台湾人は 20 万人を超えており、そのうちおよそ 3 万人が死亡しているとのことである。台湾から戦地に赴いたその 20 万人中の 6 千人ほどが原住民族だった。

高砂義勇隊は兵站や土木工事を本来の任務としていたが、次第に戦闘にも投入されるようになり、南方のジャングルに慣れない日本軍にとって、戦闘のみならず物資や傷病者の担送、現地での自活、現地住民との接触の面でも大きな力となった。戦病死者の割合は、作戦をともにした日本の軍人よりも高かったと言われている。こうした動員を支えたのが、総督府が力を入れていた「皇民化運動」（国語運動や改姓名運動など）であり、「皇民化教育」であったに違いない。敗戦から 30 年も経った 1974 年に、インドネシアのジャングルで原住民族出身で元日本兵の中村輝夫が発見された。彼は、日本人として教育され日本兵として戦地に赴いたにもかかわらず、その後日本兵として補償の対象となることはなかった。私などは、ジャングルから帰還した横井庄一や小野田寛郎のことは知っていても、中村さんのことなど何も知らなかった。彼のことに関しては、河崎眞澄『還ってきた台湾人日本兵』（文春新書、2003 年）が詳しい。

台湾の「慰安婦」に関しても気になるところである。私などはその存在すら知らなかったからである。最近新聞の切り抜きを整理していたら、『しんぶん赤旗』（2023 年 11 月 20 日）の記事が目に留まった。それによれば、台北市内には旧日本軍「慰安婦」問題を中心に展示する記念館「アマ・ミュージアム平和と女性人権館」があり、台湾や海外から多くの人が参観に訪れているというのである。「アマ」は「おばあさん」の意である。記事の内容を紹介してみよう。

> 第 2 次世界大戦当時、日本の植民地だった台湾では、若い女が看護婦や食堂の仕事があるなどとだまされ、海外に連れていかれました。アジア各地の日本軍慰安所で「慰安婦」にさせられたのです。拒絶して台湾に戻ることもできず、被害女性らは事実上「強制」だったと証言しています。記念館の一角の天井には絡み合った線があります。これは、被害女性たちの複雑な心情を表しています。その下に、3 人の女性の生前の写真が飾られ、録音された実際の証言を聞くことができます。
>
> 記念館を運営する台北市婦女救援社会福利事業基金会の杜瑛秋（と・えいしゅう）執行長は「アマたちの体験、心の傷の表現を重視している」と語ります。同基金会によると、台湾では 2,000 人以上の被害女性がおり、1992 年以降に 58 人の生存被害者が確認されました。今年 5 月に最後の生存者だった女性が 92 歳で死亡。基金会は「アマたちが亡くなっても、歴史が消えることはない。引き続き日本政府に対し、アマや遺族への謝罪と補償を求めていく」との声明を発表しました。

記事の内容は以上のようなものである。日本兵として戦争に動員された台湾の人々に対する

戦後補償の問題が残されたのだが、国籍条項を盾にした日本政府の対応は余りにも冷淡なものであった。ここで詳しく紹介する余裕はないので、今回台湾に出掛ける間際に見た映画『トロッコ』（監督・川口浩史、2009 年）に登場していた一シーンだけを書き加えておく。日本兵として戦地に赴いた台湾の老人のところに、補償が許可されなかったとの通知が届く。いつもは花蓮の片田舎で静かに暮らしている老人であるが、その時に見せた怒りと悲しみに満ちた苦悶の表情が、今でも忘れられない。

では、戦時下における台湾の様子はどんなものだったのであろうか。台湾の高校の歴史教科書である『台湾の歴史』には、我々には余り知られていないのではないかと思われることが書かれていた。もちろん私も何も知らなかったから、興味津々で読んだ。1928 年には日本共産党の支部として台湾共産党が結成され、謝雪紅という女性革命家が主要なリーダーの一人だったという。台湾共産党は総督府専制の打倒や台湾共和国の樹立を主張し、積極的に新文協（1921 年に発足した台湾文化協会は 27 年に分裂し、主流派となった左派は「新文協」を名乗った）と台湾農民組合に介入し、その主導権を握ったのだという。

さらに興味深かったのは、以下のような事件が紹介されていたことである。日本の国内でも治安維持法が猛威を振るっており、共産主義者や自由主義者が虐殺されたり獄中死したりしたが、それをはるかに超えるような苛烈な弾圧である。植民地だった台湾と朝鮮では、治安維持法に反したとして、日本国内では例をみない死刑判決が下され執行されていたからである。「一視同仁」（どんな人に対しても平等に接すること）が叫ばれていた世界に、何が起こっていたのか。台湾人は総督府による強力な動員下で、戦争には相当な協力をしていたにもかかわらず、日本側からは不信感を持たれ続けた。総督府は戦時体制の下で台湾人エリートの反政府運動を抑え込んでいたが、それだけではなく、通敵や反乱の動きがあると疑われる者に対しては厳しく対処した。例えば 1940 年、鉱業界の重鎮である李建興が抗日組織を作ったとの疑いで逮捕され、それに 500 人が巻き添えとなり、その内 300 人以上が獄中死している(瑞芳事件)。翌年には、欧清石や郭国基らが国民党軍の上陸計画に協力したと疑われ、数百人が逮捕された(東港事件)。1944 年には蘇澳の漁民 71 人が米軍の潜水艦に情報を提供したとして逮捕され、全員が死亡している（蘇澳事件)。しかしこれらの事件の大方は、警察や検察のでっち上げや誇張された情報によるものであった。日本の軍部が台湾人に対していかに強い不信感を抱き、いかに強圧的に振る舞っていたのかを端的に物語る事件の数々である。

高座海軍工廠と台湾少年工のこと

もう一つ触れておきたいことがある。台湾少年工のことである。今回日本人の開拓村を眺め

てきたことは既に紹介済みだが、そこで小さな亭（休憩所のようなもの）を見た。それと同じような建物を、私は 2 年程前に神奈川県の大和市にある泉の森公園のなかで見かけたことがある。それは「台湾亭」と名付けられており、いささか場違いなところに建てられた感があった。だが、説明板を読んでみるとそこにある意味がよくわかった。1943 年に、座間市と海老名市にまたがった地に、大規模な海軍の航空機製造工場が設置された。それが高座海軍工廠である。そこに台湾の少年たちが動員され、彼らは大和市にあった寄宿舎に住んで働いていた。その彼らが昔を懐かしんで 1993 年に「台湾亭」を建て、大和市に寄贈したものだった。この辺りのことに関しては、野口毅『台湾少年工と第二の故郷　高座海軍工廠に結ばれた絆は今も』（展転社、1999 年）が詳しい。

では彼らは何故日本に来たのか。戦線の拡大によって兵員の補充に追われていた日本は、深刻な若年労働力不足に見舞われていた。この労働力不足を解消することを目的として、台湾で募集されたのが台湾少年工である。その数は 8,400 人にも及んだ。高座海軍工廠の責任者が台湾総督府を訪れ、台湾で少年たちを募集したい旨申し入れて協力を要請するのである。その動員は、学校長や教師の協力なしにはありえなかったから、ここでも「皇民化教育」が大きな役割を果たしたであろうことは間違いない。動員されたのは 12～16 歳までの少年と、彼らを指導する 17～19 歳の中学生である。

食費と生活費は公費から賄われ賃金までもらえるという触れ込みであり、働きながら勉強すれば旧制工業中学校の卒業資格を得られ、将来は航空技師への道も開かれているというのが謳い文句であったようだ。純真な少年工たちは、そうした未来を素直に信じたのであろう。敗戦までの約 2 年間、厚木海軍飛行場に配属される戦闘機雷電の製造に携わり、約 400 人が旧制工業中学校の卒業資格を得たのだという。戦後少年工たちは台湾に帰り、戒厳令が解除されて後に同窓組織「台湾高座会」を結成する。2018 年には台湾少年工来日 75 周年を記念する歓迎大会が大和市で行われた。座間市内にも、台湾少年工を称える顕彰碑が設置されているとのこと。当時の少年工たちも高齢化しており、大規模な歓迎式典はこの回が最後となったようだ。歴史の幕が今静かに閉じようとしているのであろう。

「二・二八事件」をめぐって（一）－事件の背景とは－

紙幅はとうに尽きたので、書き残したもののうち大事なことだけでも記しておきたい。それは、あの「虐殺と粛清の二･二八事件」（伊藤隆）のことである。台湾に来て 6 日目となる 2 月 28 日の朝 9 時に、我々一行を乗せた専用バスはホテルを出発して「国立海洋生物博物館」に向かった。この日はすっきりと晴れ渡り、大分暑くなりそうな気配であった。「た・だ・し」が口

癖のガイドの馬（マー）さんが、朝の挨拶の後次のようなことを語った。「みなさん、今日は台湾は休日なんです。何故だか分かりますか。二･二八事件が起こった日だからなんです」。この事件のことについては、頭の片隅にぼんやりながら記憶されてはいたが、その詳細はまったくと言っていいほど知らなかったし、ましてや休日になっているなどとは思いもしなかった。調べてみると、2 月 28 日は「和平祈念日」と呼ばれていて、台湾の人々にとっては忘れようにも忘れられない日なのであった。

今から 77 年前の 1947 年 2 月 28 日、この日に一体何があったのか。話は 1945 年に日本が連合国に降伏したところまで遡る。日本軍は蔣介石の率いる中国軍に投降したのだが、そのころすでに中国では国民党と共産党の間の国共内戦が始まっていた。重慶にあった蔣介石の国民党政権は、陳儀（チン・ギ）を台湾省行政長官として台北に送り込むことになる。その彼は 10 月 25 日に祖国復帰を祝う光復大会を開催し､台湾が日本の植民地支配から脱して国民党政権の下に置かれることを宣言した。それ以来この日は光復節となった。この時から、台湾人はそれまでの日本国籍から中華民国の国籍となって「本省人」と称されるようになり、中国から新たに渡ってきた中国人は外省人として区別されることになった。

当初台湾の人々は中国本土から来た軍人や官吏を歓迎したが、やがて彼らの汚職の凄まじさに驚き、失望し、憤慨する。軍人は、長期に渡った日中戦争と国共内戦の影響で荒んでおり、犯罪を犯す者も多かったようだが､にもかかわらず犯人が処罰されないこともしばしばだった。また、日本企業の財産や個人の私有財産はすべて接収されて公営企業に移管されたが、公営企業の上級職を外省人の官吏が独占したこともあって、彼らの中には私腹を肥やす者が多かったようだ。そうしたことが、本省人である台湾人の反感を買ったことは言うまでもない。また台湾産の米が中国本土に送られたために米価が急騰し、それにともなって経済も混乱した。日本の統治下で「植民地的近代化」を体験した台湾人にとって、治安の悪化や役人の著しい汚職、軍人や兵士などの暴行、さらに経済の混乱などは到底受け入れがたいものであった。当時の台湾人は、上記のような状況を「犬（日本人）去りて、豚（中華民国人）来たる」（狗去豬來）と呼んで揶揄したという。

「二・二八事件」をめぐって（二）ー事件から白色テロへー

以上が二･二八事件の背景である。1947 年 2 月 28 日、ついに本省人と外省人の衝突事件がおこった。事件の発端は、前日の夕方に台北市の夜市で行われた密輸タバコの取り締まりだった。国民党政府は、日本の台湾総督府の政策を引き継ぎタバコを専売品としていた。これが重要な財源となっていたのだが、同時に政府の高官とその関係者はそのタバコを密輸することによっ

て稼いでいた。いわば密輸タバコの元締めを放置しながら末端の街頭小売人ばかりを摘発することに、本省人は反発していたのである。外省人の取締官が、中年の台湾人寡婦から密輸タバコを没収し、さらには所持金まで取り上げた。跪いて現金の返却を哀願した彼女の頭を銃で殴りつけたために、憤慨した群衆が一斉に取締官に抗議の声を上げた。あわてた取締官の発泡によって一人の市民が死亡したために群衆の怒りは激しくなり、そこから逃れようと取締官は近くの警察局に逃げ込む事態となる。

そして翌 28 日である。群衆は専売局に押しかけて抗議し、署員を殴りつけ書類を焼き払い、午後には長官公署前広場に集まり、抗議の声を上げると共に政治改革を要求した。ところが公署屋上から憲兵が機関銃を乱射したため、数十人の死傷者が出るのである。事態は一気に緊迫し、台北市の商店は軒並み閉店、工場は操業を停止、学生は授業をボイコットし、万を超える市民が抗議行動に立ち上がり市中は騒然となった。警備総司令部は戒厳令を布告したが、市民は放送局を占拠して全台湾に事件の発生を知らせた。こうして３月１日には暴動は台湾全土に波及し、各地で官庁や警察署が襲撃され、外省人とみられた人々は子どもも含めて暴行を受けた。

陳儀行政長官は本省人による事件処理委員会を設置し、その報告をもとに５日から６日にかけて官庁などでの本省人の登用、専売制の廃止、言論・出版・集会の自由、汚職官吏の追放などの改革を約束して、暴動を鎮めようとした。しかしながらそうした対応は時間稼ぎに過ぎなかったようで、その裏では中国本土から派遣された憲兵２千、陸軍１万１千の増援部隊が３月８日に基隆港と高雄港に上陸し、手当たり次第に台湾人に向けて発砲し始めるのである。この部隊は近代的な武器で武装しており、そうしたものを持たなかった本省人に抵抗するすべはなかった。市民に対する容赦のない虐殺を行うことによって、警備総司令部はわずかの間に全島を平定することになる。

しかしながら、事件はそこで終わったわけではなかった。平定直後から、「粛奸」と「清郷」を名目に全島の戸籍調査が実施され、暴動に関与した疑いのある人物は次々と逮捕され、そして処刑された。また、たとえ事件に無関係ではあっても、外省人に対して批判的な言動を取っていた人間、とりわけ知識人が数多く逮捕され、その多くが消息を絶った。白色テロ、すなわち為政者の反体制側に対する徹底した弾圧の始まりである。日本の統治下で教育を受けた彼らを、根絶やしにするかの如くであったという。先の伊藤によれば、二・二八事件の１ヶ月余で殺害された台湾人は、国民党政権のその後の発表では約 2 万 8 千人を数えており、この数字は、日本の 50 年間の統治下において武力によって抵抗したために殺戮された台湾人の数に、匹敵するのだという。

その彼は、悲憤を込めて次のような言葉で弾劾している。「殺戮には機関銃が使用されたほか、

鼻や耳を削ぎ落とした上に、掌に針金を通して数人一組に繋いだり、麻袋に詰めて海や川に投げ捨てるなど、きわめて残虐なものであった。逮捕されても処刑の前に市中を引き回され、処刑後は数日間にわたり、市民へのみせしめとして放置された人も多々あった。とても 20 世紀に生きる文明人のなせる業とは信じ難い野蛮な手口であり、『祖国』や『同胞』の仕業ではあり得なかった」と。国民党政権が反体制派に対して行った、言語に絶する余りにも残酷な白色テロである。

「二・二八事件」をめぐって（三）ー「幌馬車の歌」のことなどー

政治犯として緑島（リューダオ）の監獄に送られた人々の中には、共産主義者やその同調者もいた。彼らは、二・二八事件を本省人対外省人というエスニック・グループ間の対立としてのみ見ていたわけではない。農村における地主対小作人の階級関係を重視していたからである。だからこそ危険分子として摘発されたのであろう。監獄に送られた彼らも処刑を免れたわけではなかった。ここでも「死の点呼」が続いたのである。龔昭勲（キョウ・ショウクン）の『台湾「白色テロ」の時代　死の行進』（展転社、2023 年）には、次のような話が書き留められている。独裁者蒋介石の白色テロの凄まじさとともに、そのテロに屈することのなかった人々の気高い姿が浮かび上がってきて、粛然とせざるを得なかった。そしてこの私は、台東のホテルで宿泊した朝に海岸まで出て眺めた緑島を、何度も思い浮かべた。

> その後、《光明報案件》で逮捕された基隆中学の校長、鍾浩東先生は死刑を免れないと覚悟して、皆にお願いをした。自分が死の点呼を受けて出かける時に、「安息歌」ではなく、「幌馬車の歌」を歌ってくれと頼んだ。なぜ「幌馬車の歌」なのか。鍾校長先生に曰く、「幌馬車の歌」が彼の故郷の田園の景色を思い出させるし、また彼が結婚前に、奥さんと付き合っていた時に、奥さんにこの歌を教えて、よく二人で一緒に歌っていたからだ。鍾浩東校長先生は、「幌馬車の歌」で自分の人生に別れを告げたいと思っていた。そしてとうとうその日が来た。鍾浩東校長は死の点呼を受けた。そして、鍾先生が牢屋を出る前に、同じ牢屋にいた仲間たちに、一人ずつ礼儀正しく挨拶をしながら、握手して別れを告げた。その日、拘置所にいるすべての台湾出身の受難者仲間（日本語のできる人）が「幌馬車の歌」を歌って、鍾浩東校長先生を送別した。そして、死の点呼を受けた勇敢な闘士たち（鍾浩東校長を含め）は、皆胸を張って死の脅威を恐れず、独裁者の脅迫に屈せず、前へと進んでいった。「幌馬車の歌」の歌声は、波のように瞬く間に鍾浩東校長先生が出て行く牢屋から、国防部軍法處の一時拘置所へ広がり、津波のように青島東路三番地を追い（ママ）

被さった。

ここに登場する「幌馬車の歌」は、監督・侯孝賢の名を世界に知らしめた映画『非情城市』(1989年）だけではなく、同監督の『好男好女』（1995年）でも流れる。先のような史実が既に知られていたからであろう。望郷や郷愁や別離を歌った日本語のこの歌（作詞・山田としを、作曲・原野為二）は、1932年にミス・コロンビアと櫻井健二のデュエットで歌われた。日本でもそれなりにヒットしたようだが、台湾ではどうも大流行したらしい。鍾浩東夫妻を始め当時の台湾の人々の愛唱歌となったこの歌は、人々を恐怖のどん底に突き落とした白色テロの時代をまざまざと思い出させることによって、斃れた人々を悼む鎮魂の歌になったかのようである。

そしてこの私には、共産主義者であった鍾浩東のような二・二八事件で殺害された不屈の人々が、映画『セデック・バレ』に登場するセデック族のマヘボ社頭目モーナ・ルダオの、末裔のようにも思われた。「美麗島」台湾は、過去と向き合う勇気を持った島へと変わったのであり、二・二八事件を和平祈念日として記憶に留めることによって、その美しさをさらに増そうとしているのかもしれない。ふとそんなことを思った。

書き残したこと－ある遺書を読んで－

「早春の台湾感傷旅行」をようやく書き終えた後になって、藍博洲（ラン・ポゥソゥ）『幌馬車の歌』(間ふさ子・塩森由岐子・妹尾加代訳、草風館、2006年）の存在を知った。『非情城市』や『好男好女』の原作ともなった著作であり、今頃知るとは何とも迂闊な話である。本書は、帯にもあるように「台湾知識人の悲劇－台湾を襲った白色テロを克明に追求した迫真のドキュメント」である。二・二八事件とその後に続く白色テロに見舞われた関係者からのインタビューのみで構成されたこの異色の著作には、侯孝賢も「記録されたものはすべて存在する」と題した一文を寄せており、「記録されたものは、人間が語った言葉であり、生きた証人である。 勝手に改竄したり抹殺できるなどと思ってはならない。これこそが歴史の目なのだ。この目を持たない世界は一体どのような世界なのか！私には想像だにできない。『幌馬車の歌』は1991年に出版され、今日新版が出された。私はこの一文を以て、藍博洲とともに励みつづけることを誓いたい」と述べている。

他にも紹介したいところは多々あるのだが、もはやこれ以上原稿を書き続けるわけにはいかない。35歳で銃殺刑に処された鍾浩東が、妻である蒋碧玉に宛てた遺書（死の12日前の1950年10月2日の深夜に書かれた）だけを紹介しておきたい。今の私には、どうしても素通りすることが出来なかったからである。遺書の末尾は、「私はいつまでも貴女を愛し、貴女を偲び、貴

女の幸せを祈っています」で結ばれている。そしてこの遺書は、「鍾浩東や蒋碧玉を始めとした1950 年代の政治受難者たち」に捧げられた映画である、『好男好女』のラストシーンにも登場している。

蘊瑜（オンユ）へ

私は今、重苦しい気持ちでこれをしたためている。貴女と一緒になって早 13 年、長くもあり短くもあり。抗日戦のあの苦難のさなか、貴女はそのか弱い身体で苦楽を共にし、かれこれ 10 年近く耐え忍んでくれた。抗日活動にかまけ、子供の養育に当たって何の手助けもできないまま、貴女は一人で自分の責任を全うしてくれた。光復後、台湾に戻ってからは仕事の関係でまた一緒に暮らすこともできず、家のことは全て貴女に任せきりにし苦労をかけてしまった。ここ一年は、今までにまして貴女を苦しめる結果となってしまった。実際、貴女たちがどんな暮らしをしているのか想像するのもそら恐ろしい気がする。面会の折、貴女がまた痩せてしまったように感じた。何もかも全てが、言うなれば…不運だった。

しかし蘊瑜、私たちにもかつて、かけがえのない煌くような青春の日々があった。あの頃の思い出と感動は、しばしば私の沈痛な心を和らげてくれる。蘊瑜、苦しい時には何か楽しいことを見つけようではないか! 忍耐は多くの苦難に打ち勝ち、活力を増進することができるから。

蘊瑜、どうか驚かないで欲しい。悲嘆に暮れることもない。もし仮に万が一 ー 無論これはあくまで仮定の話で現実にならないことを祈るばかりだがー 私の行く末が貴女にとって最も不本意な結果となってしまったら、君はどうするだろうか？ 私には容易に想像がつく。貴女の心は言葉で言い尽くせないほどの衝撃を受けて、哀しみの苦海に深く沈んでしまうだろう。しかし私は、貴女が一刻も早くその苦しみから立ち直って力強く生きていってくれることを願っている。

注記

本稿は、「敬徳書院」（https://www.keitoku-shoin.com）のブログに掲載した記事を改稿してまとめたものである。